

言葉の時間 四人の時調と翻訳の出会いと響き

——前書きにかえて

安修賢

本書を通じて、韓国の伝統的な詩歌形式である時調の特性を探り、その普遍性と国際的な受容の可能性を論じる。時調は、韓国文学において重要な役割を果たしてきたが、その後には、言語が文字に定着する過程で独自に進化した特異な歴史がある。本書では、この定着の過程を中心に、時調文学がどのように現代にまで受け継がれ、その文学的な影響力を拡大してきたかについて詳しく探求する。

時調は元来、口承で伝えられてきた詩歌形式であり、韓国の民間に深く根ざしている。その起源は古代まで遡り、韓国固有の抒情詩として数世紀にわたり歌い継がれてきた。しかし、文字の登場と普及に伴い、時調はその内容を文字化し、記録文学の形式を取るようになった。このプロセスは、単なる伝承方法の変化にとどまらず、時調の内容や形式に深

みを加え、さらなる発展をもたらした。

文字に定着した時調は、単なる音韻やリズムの再現を超え、詩人たちの思想や感情を後世に伝える文学的な手段となった。短い形式の中で深い感情や思想を表現する時調は、その制約を逆に活かし、濃密な詩的世界を創り上げてきた。初章・中章・終章の三章六句、十二音歩の約四十五字で構成され、音数律が厳密に定められている形式である。時調とは、詩人たちにとって限られた形式で最大限の表現力を発揮する挑戦となった。

こうした形式的な制約は、時調が口承文学として育まれた環境と深く結びついている。古代韓国では、文字が普及する以前、詩歌は口承で伝えられ、その韻律やリズムが記憶を助ける役割を果たした。時調が文字化された後も、そのリズム感や音数律の美しさは維持され、文字による記録が時調の普遍性と持続性を高める役割を果たした。

しかし、文字化によって口承文学としての時調が持っていた即興性や地域ごとの多様性は一部失われた。この点において、時調の文字化は重要な転換点となり、口承文学から記録文学への移行は時調の形式や内容に変化をもたらした。それでも、文字化された時調はその後発展を続け、社会の上層階級や知識層にも広く受け入れられるようになった。

本書の目的は、このようにして定着した時調文学の発展過程とその美学を追いながら、時調が世界文学として地位を確立できる可能性を探ることである。時調は、自然との対話や人生の無常、社会的矛盾といった普遍的なテーマを扱い、これによって他の文化圏でも共感を呼び起こす要素を持っている。そのため、時調を翻訳することで、韓国固有の文学

形式を持つ普遍性を世界に伝えることができると考える。

時調の翻訳は、単なる言葉の置き換えではなく、詩の文化的背景やリズムを異なる言語で再現する試みである。特に、短い形式の中に凝縮された感情や思想を表現する時調を翻訳する際には、文化的背景と言語的リズムの違いを考慮した非常に慎重なアプローチが必要である。詩の抒情性やリズムを損なわないようにするための多様な方法を模索しなければならぬ。

本書では、四人の時調詩人の代表作を通じて、時調の美学や哲学を再考し、彼らが生きた時代背景や社会状況を踏まえて時調が世界文学として評価されるべき道を模索する。これにより、時調の国際的な発展可能性を提示し、韓国文学が持つ普遍的価値を広く発信することを目指す。

時調は、韓国文学の中で長い歴史を持ちながら、その中に表現されているテーマは非常に現代的であり、国境や時代を超えて多くの人々に共感を呼び起こすものである。本書を通じて、時調の新たな可能性を発見し、その美しさが世界中の読者に感銘を与え、確固たる文芸形式として新たな地位を確立することを確信している。